

長野県立大学の教育と学生の成長を 可視化する①

—学生が感じる全寮制の利点・欠点—

加藤 孝士・中山 智哉・新保 みさ・宮城 正作
小笠原明子・太田 光洋・笠原 賀子

1. 本研究に係る事業の趣意

本研究は、長野県立大学（以下、本学）の公募型裁量経費事業（理事長裁量経費：2018年4月—2024年（予定））として採択された「ライフスキルの成長を促す大学の教育力評価事業」の一環で行われた調査の一部をまとめたものである。

本学は、「長野県の知の礎となり、未来を切り拓くリーダーを輩出し、世界の持続的発展を可能にする研究成果を発信することで、人類のより良い未来を創造し、発展させる」という理念の基、「リーダー輩出」、「地域イノベーション」、「グローバル発信」を使命として誕生した（令和2年10月現在：長野県立大学HP基本理念）。そして、これらを達成するため、「少人数教育」、「1年次全寮制」、「全員参加の海外プログラムや英語教育」、「ディスカッション授業」、「クォーター制」など、特徴的な教育プログラムを実践している。

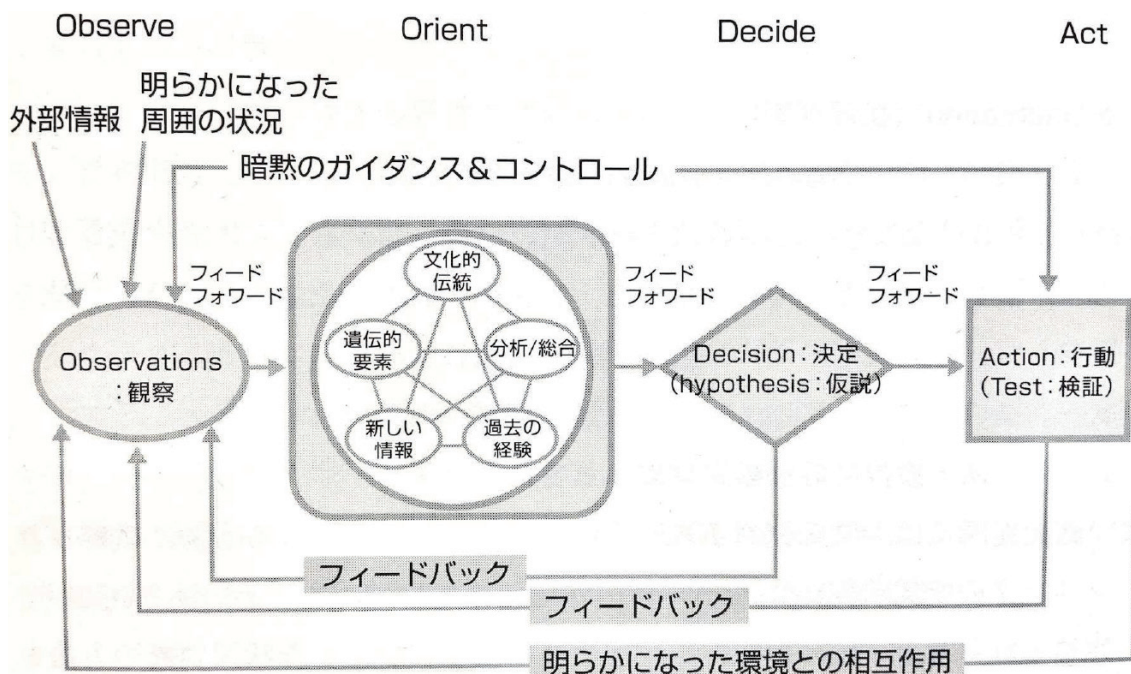
しかし、「これらの教育がどのように学生の成長に寄与するのか」に関して検証しなければ、その教育的効果を客観的に主張することは出来ない。そして、大学というアカデミックな場において、教育的効果を主観で語るのではなく、客観的データを基に語ることが求められる。そのため、本事業は、本学の教育の特徴が学生の学びにどのような影響を与えているのかを調査・研究し学びの様相を可視化することを目指す。

また、「自ら考え、自ら学び、主体的に行動する」ことも本学の使命に掲げていることから（令和2年10月現在：長野県立大学HP基本理念）、本事業では教職員の目線ではなく、「主体的な存在である学生」の視点を重視し、実際に教育を受けている学生が、「どのように本学の教育を捉えているのか」、「自身の成長をどのように実感しているのか」を示す。そこで、本事業では、本学の学生を対象とした調査を継続的に行ない（開学5年間）、「学生が捉える学びの特徴」や「学生がどのように成長（変化）を実感しているのか」を明らかにする。これらを明らかにすることで、学生にとって有益な学びを示すことや教育をさ

らに良いものに修正・改善していくこと、高校生が大学を選択する際の有益な情報を提供することに繋がると考えている。

2. はじめに

事業の趣意を達成するため、1年目は、学生が本学の教育的特徴をどのように捉えているのかをOODAループの視点で調査・検討を行った。OODAループとは、Boydによって提唱された手法であり（Boyd, 2010）、PDCAサイクルと対比して説明されることが多い。PDCAは、問題解決の手法として、計画（Plan）、実行（Do）、評価（Check）、改善（Action）の順に処理を行い、サイクル的に改善と計画を繰り返す。この手法は、経済学や教育学など様々な分野で大きな広がりを見せており、有効性を示す研究も多い（小島・池田・桑田・中西、2018など）。しかしながら、このサイクルは、「計画」からスタートさせるため、今まで扱ったことのない問題や年初に改善提案を出す場合には、不具合が生じる可能性が指摘されている（吉川、2020）¹。一方、OODAループは、観察（Observation/Observe）、状況判断（Orientation/Orient）、決定（Decision/Decide）、行動（Action/Act）の順に各段階を実行する。その中でも、特に第一段階である「観察」を重視し、各段階での検証後、観察に戻ることも認めており、新しい情報を基に、柔軟に対応するための方略が盛り込まれている（図1：森川、2013）。



「The Essence of Winning and Losing」(John.R.Boyd) を基に作成

図1 OODAループのモデル（森川、2013）

1 Observationを加えたOPDCAサイクル等も提案されているものの、本質的な改良には至っていない（Foresight University, 2010）。

今回の事業を考えた場合、「特徴的な教育の初年度」であることや「学生の視点を中心に捉えること」を考慮した場合、より柔軟性のあるOODAループの視点が適していると考えられる。このループに当てはめると、初年度は、状況を把握するための「観察」とその結果を基に調査項目を整理し、範囲を拡大し追加調査を行う「状況判断」にあたる。そして、2年目以降は、1年目の結果を基に仮説を設定し、PDCAサイクルに基づき追跡調査を行う。

3. 課題の背景と目的

2000年代以降、大学生の対人関係能力の低下やストレスに対する耐性の低さ、ストレス対処の不適切さなどが指摘され（齋藤、2002）、時代の変化とともに、大学生のライフスキルが問題視されている。この背景として、都市化、少子化、受験の低年齢化といった社会環境の変化によって、社会性を培う機会が減少している等の理由が考えられる。そのような中、中央教育審議会（2008）も「4年生を卒業する人物が最低限、身につけておくべき能力」を「学士力」と名付け、「知識・理解（文化、社会、自然等）」、「汎用的技能（コミュニケーションスキル、数量的スキル、問題解決能力等）」、「態度・志向性（自己管理能力、チームワーク、倫理観、社会的責任等）」、「総合的な学習経験と創造的思考力」の4つを挙げ大学在学中に学ぶことの必要性を強調している。この能力の中にも、コミュニケーション能力やチームワークといった用語が具体的に盛り込まれており、大学教育において、対人関係が重要な能力として位置づけられていることが分かる。

その後、様々な視点から、大学生の不適応に関する研究も積み重ねられ、「小1プロブレム」、「中1ギャップ」、「高1クライシス」といった各学校種の変化に伴う様々な問題に加え、“高校までの学校段階と大学との様々なギャップに対し、多くの大学1年生が入学後に強い戸惑いや困難を感じる”、「大1コンフュージョン」に関する研究が行われるなど（原田・池谷・松井・望月、2018；原田・池谷、2019）、大学生を対象とした、教育上の問題を起源とした研究もみられるようになってきた。このような中、各大学では、学生をどのように学校に適應させ、教育し、社会に送り出すかが大きな課題となっており、独自の取り組みを行っている。

その取り組みや方針を理解するための手掛かりとなるのが各大学のディプロマ・ポリシー（以下：DP）である。「DP」とは「学位授与の判断のための基本的な考え方として、修了要件や、育成する人材に修得を期待する能力などを示したもの」で各大学によって、どのような学生を育てていくのかを明文化し、教育の特徴を反映させている。この各大学で設定するDPに目を向けると、多くの大学が、「専門知識」や「教養」等の知識に関する事柄だけでなく、「コミュニケーション能力」や「対人関係能力」といった、「学士力」で示されている能力に言及している。

しかしながら、大学生を扱った研究に目を向けると、大学への適應等に注目が集中しており（百崎・山本、2020など）、学生自身の人間的成長に着目し、その成長のプロセスを扱っ

た調査・報告はほとんどみられない。さらに、近年は、「アセスメントポリシー」を設定する等、各大学の学びを評価し、可視化していく取り組みが行われているものの、コミュニケーション能力等に関しては明確に記載されておらず、評価の仕組み（枠組み）が十分ではない。よって、各大学の特徴を踏まえたうえで、どのような学生が成長しているのかを示し、大学の教育力の強みや弱みを評価しつつ、教育を再構成していくことが求められている。

そこで本研究では、本学の掲げている目標を基に、大学生としての精神的な成長を明らかにし、本学の目標を達成するための基礎的資料の提供を目指した。

本学は、DPとして、グローバルマネジメント学科（以下GM学科）では、「リーダーシップ」や「チャレンジする意識」など、食健康学科では、「人とのかかわりを大切にすること」や「情報収集力」など、こども学科では「感受性」や「計画性」などが挙げられているなど、知識以外の人間力も養成の柱として挙げている。そして、これらの能力を育むために、「少人数教育」、「1年次全寮制」、「全員参加の海外プログラムや英語教育」、「ディスカッション授業」、「クォーター制」などの特徴的な学習方法を設定し、教育的効果を想定している（令和2年10月現在：長野県立大学HP基本理念、2020）。

しかしながら、このような教育効果を期待し、大学側が設定した教育プログラムについて、「実際に想定通りの機会が提供されているのか」や「学生がそうした教育プログラムをどのように捉えているか」は、不透明な状況である。特に、「全寮制」のように評価することが難しい側面については、未知数な部分が多く、学生がどのような認識をもち生活をしているかも明らかにされていない。そこで、本報告では、「全寮制」に着目し、学生の認識を示すことを目的とし、2つの調査を行った。

4. 「寮生活に関する意識」の探索的調査（調査1）

（1）目的

「全寮制」の生活の中で、学生が感じる教育の効果がもつポジティブな側面（利点）とネガティブな側面（欠点）を明らかにする。

（2）方法

①調査協力者

2018年度入学学生（開学初年度生）72名（食健康学科31名、こども学科41名）。

②調査時期

2018年4月末に調査を行った。

③手続き

大学の授業を利用し、授業終了後、授業担当者とは異なる教員によって、調査用紙の配布・回収を行った。

④調査内容²

デモグラフィック変数：性別、年齢、学年、学科、居住環境、等をたずねた。

寮生活の満足度：「寮生活にどのくらい満足していますか？」という設問について4件法で回答を求めた（4：満足している～1：満足していない）。

寮生活のポジティブな側面（利点）：「寮生活をしていて、良いところを自由に記入してください。」という設問について自由記述で回答を求めた。

寮生活のネガティブな側面（欠点）：「寮生活をしていて、嫌なところを自由に記入してください。」という設問について自由記述で回答を求めた。

⑤倫理的配慮

調査用紙は、無記名であり、個人が特定されない状態で行った。①結果は、研究以外の目的で使用されないこと。②調査への参加は自由意志であり、回答前や回答の途中で、やめてもいいこと。③回答をもって、調査の同意と見なすことを調査用紙に記載したうえで、調査の際には調査者から口頭で説明し実施した。

⑥分析方法

量的データの分析はHAD（Ver. 16.05：清水、2016）を用いた。テキストデータの分析は、KH Coder（Ver. 3：2017）を用いテキストマイニングを行った。テキストマイニングでは、前処理後、Jaccard係数（複数の集合に含まれる要素のうち、共通要素が占める割合を表しており、係数は0から1の間の値となる。数値は1に近いほど類似度が高いことを意味している。）を算出し、共起ネットワークを作図して、語の使用傾向を示す。

（3）結果と考察

①調査協力者

調査協力者は、食健康学科31名（男性2名、女性29名）、こども学科41名（女性41名）の計72名（回収率100%）であった。平均年齢は18.14歳（±0.38）であった。

②自由記述の分析

寮生活のポジティブな側面とネガティブな側面を学生がどのように捉えているのかを把握することを目的とし、自由記述で回答を求めた。ここではテキストマイニングを用い、記述語のまとまりを客観的に明らかにした後、それらのキーワードを含んだ原文に当たり考察することで、今後の調査への参考資料を提供することを目指した。

1) 寮生活のポジティブな側面

「寮生活をしていて良かったところを自由に記載してください。」という質問に対して得られた回答についてテキストマイニングを行った。具体的には、詳細な分析に先立ち、明らかに同じ意味で使用されている語や漢字、ひらがなの統一を行った（沢山⇒たくさんなど）。続いて、形態素分析（文章や単語を切り分ける処理）を行い、その後、茶筌（ChaSen

2 ライフスキルや職業意識等の調査も行ったが、紙幅の都合上、ここでは報告しない。

〔8〕)を利用し、複合語を検出した。その結果、語を結びつけても同様の意味を成す語しか抽出されなかったため、今回の分析では強制語を指定せず分析を進めることにした。それらの過程を含め、今回の分析には202の文章、2,250語の総抽出語から、異なり語や助詞、助動詞を除外した984語を最終的な分析対象語として用いた。

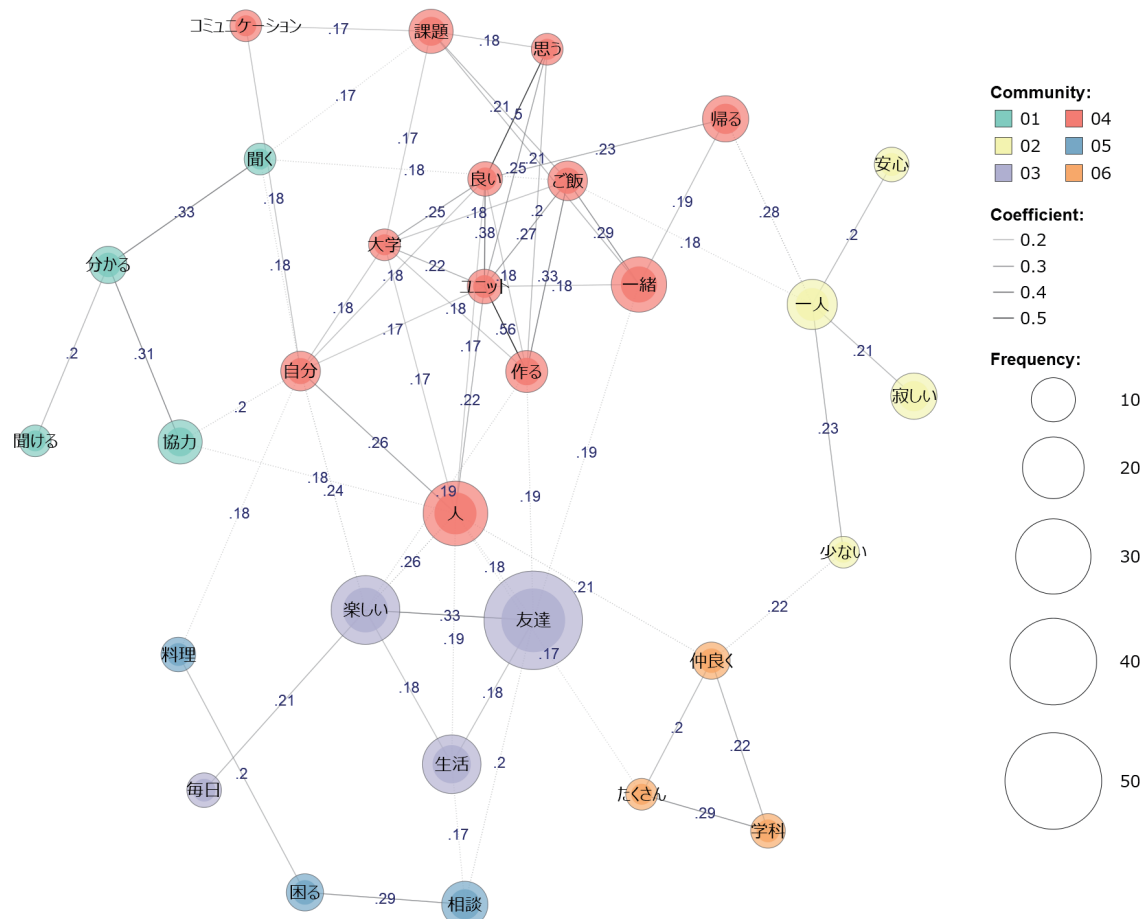


図2 寮の良いところの共起ネットワーク

得られた抽出語から共起ネットワークを作成し、語の関係を図式化した(図2:語の出現数が多いほど大きな円、関係が強いほど太い線、数値はJaccard係数)。その結果、01のまとまりは、『協力』、『分かる』、『聞く』といった語が分類され、「自分が分からないこと、できないことを友達に聞いたり、協力し合える。(こども学科)」といった文章のように、【課題や問題の解決】に関する利点が示された³。02のまとまりは、『一人』、『寂しい』、『少ない』といった語が分類され、「一人になる時間が少なく、寂しくなることが少ない(こども学科)」といった文章のように、【孤独を感じないこと】が利点として挙げられていた。03のまとまりは、『友達』、『楽しい』、『毎日』といった語が分類され、「友達たちと毎日楽しく生活

3 分かりやすさを意識し、ここでは、単語に関しては『』を用い、抽出されたカテゴリについては【】を用い表記する。

できています。朝起きておはようって言いあったり、行ってきます、行ってらっしゃいを言いあったりできる空間でとても充実しています。(こども学科)」といった文章のように、【友だちとの良好な関係性】による充実した生活がうかがえた。04のまともりは、『人』、『ユニット』、『自分』といった語が分類され、「ユニットの仲間が良い人ばかりで、一緒に遊びに行くのが楽しい。夕飯の担当が決まっています自分の負担が減る。(食健康学科)」といったように、【ユニットでの協力】によって得られる充実感がうかがえた。05のまともりは、『料理』、『困る』、『相談』といった語が分類され、「何か困ったときにすぐに相談できる人がいる。一緒に料理できる。助け合える。(食健康学科)」といったように、【困難なことに対する協力】や【料理】に関することをメリットと捉えていることが示された。06のまともりは、『仲良く』、『たくさん』、『学科』といった語が分類され、「毎日たくさん話ができるし、大人数でゲームができるから楽しい。他の学科の子とも仲良くなれる。課題や授業の情報共有がしやすい。(食健康学科)」といったような、【学科を越えたつながり】や【課題や授業の情報交換】などをプラスに感じていることが示された。

以上の結果から、【課題や問題の解決】や【困難なことに対する協力】、【課題や授業の情報交換】といった、授業や課題について友人同士が協力し合っている様子が示された。これらの関係性は、ピア・サポート（学生が学生を支援する活動）⁴に近く、全寮制という特徴的な環境下において、自然と成立したと考えられる。ピア・サポートについては、エンパワーメント等への効果も示されており（伊藤、2013）、各大学においてもコミュニティを設け、その促進に努めている（越川・磯部・池見、2012；米谷・山内、2020など）。このピア・サポートについては「(1) 苦しみに関して何かを語り、またそれを聞く(聴く)ようなコミュニケーションの場が形成されていること、(2) 語り手および聞き手(聴き手)の立場を互換できること」を要素に挙げており、生活を共にする寮生活において同じ課題に向き合う中で培われたと推測される。

また、【学科を越えたつながり】や【ユニットでの協力】といった、学科の枠を超えたつながりを利点として挙げていた。今回の調査では、管理栄養士養成課程や保育者養成課程の学生のみを調査対象者としており、必修科目が多いカリキュラムで学修している。よって、授業では他学科との関わりが難しいのが一般的であるが、寮での関わりによって、他学科とのコミュニケーションが取れていたことが示唆された。

続いて、【孤独を感じないこと】、【友だちとの良好な関係性】といった、友人との良好な関係を推察できる記述も確認された。佐藤・石井（2019）は、新入生の孤独感を検討するため、大学1年生を対象に入学直後の6月に調査を行った。その結果、大学宿舎に居住する学生は、アパート暮らしや自宅から通学する学生に比べ孤独感が高いことが示しており、本研究の結果とは異なっていた。この理由として、本学の寮は、2人部屋での生活を

4 『ピア』すなわち『仲間』あるいは『同じ境遇に立つもの』による（主として言葉のやり取りによる）対人援助という意味合いを持つ（大石・木戸・林ら、2007）。

前提としていることや、ユニットでの活動の機会を設けるなどしていることが関係している可能性がある。

加えて、【料理】に関する記述も確認されるなど、料理をすることへのポジティブな印象が示された。今回の調査に関しては、管理栄養士を目指す学生が約半数を占めていることや学科の特性上、女性が多いことなどが作用し、「食」に関する記述が抽出された可能性がある。ただし、本学は、自宅から通学可能な学生にも寮生活を課し、コミュニケーション能力の養成はもちろん、日常生活に関する自律も目指している。よって、今後は、食を中心としながらも、掃除、洗濯といった生活に関するテーマにも範囲を広げる必要が想定される。

2) 寮生活のネガティブな側面

「寮生活をしていて嫌なところを自由に記載してください」という質問に対して得られた回答について分析を行った。分析はポジティブな側面と同様の手順で前処理を行い、最終的には、総抽出文章は185文、総抽出語は1850となり、異なり語や助詞、助動詞を除外した851語を分析対象語とした。ポジティブな側面と比べると、記述は少なかった。

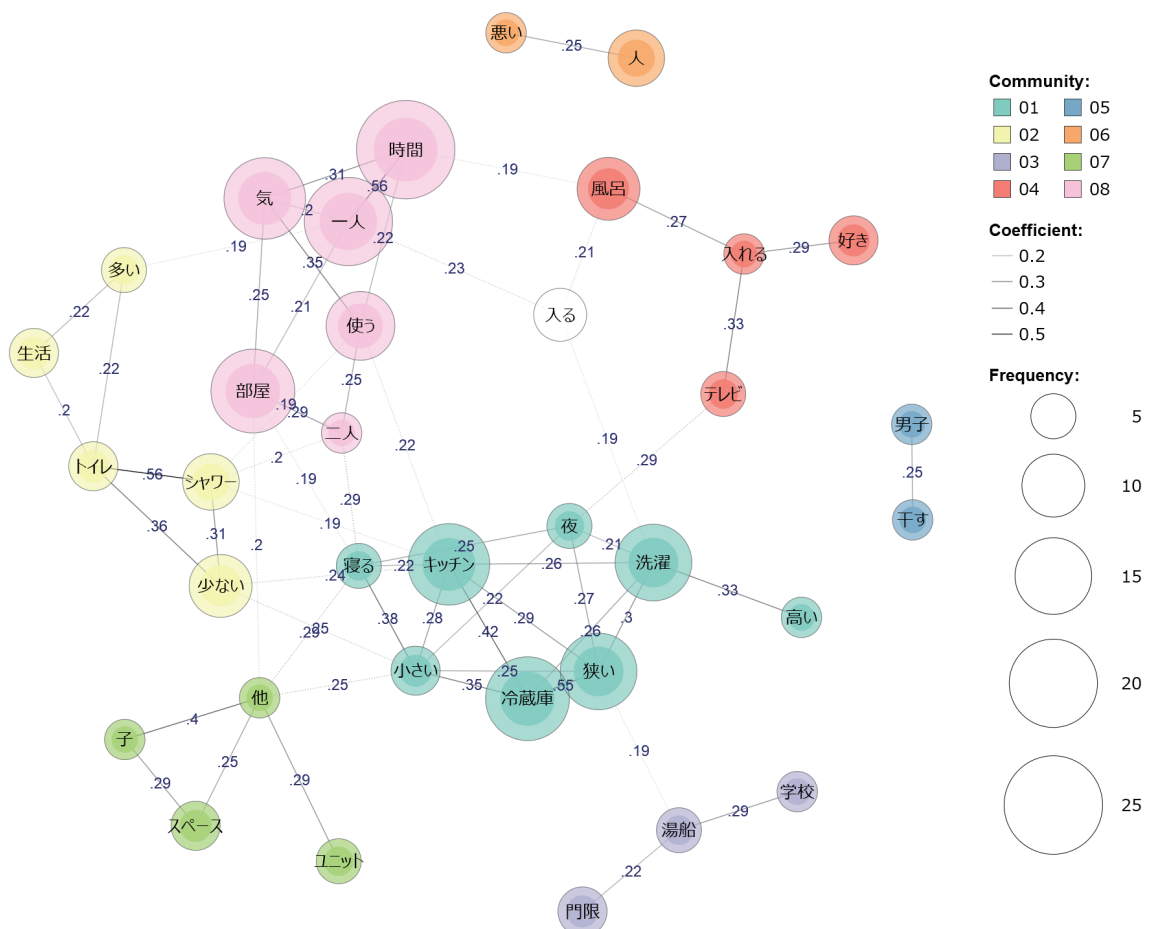


図3 寮の悪いところの共起ネットワーク

続いて、得られた抽出語から共起ネットワークを作成し、語の関係を図式化した(図3)。

その結果、01のまとまりは『キッチン』、『冷蔵庫』、『洗濯』といった語が分類され、02のまとまりでは、『トイレ』、『シャワー』、『少ない』といった語が分類され、05のまとまりでは、『男子』、『干す』といった言葉が分類された。具体的には、「冷蔵庫が小さい。シャワー、トイレが少ない。キッチンが狭い。(食健康学科)」ベランダに洗濯物を干すと男子寮から見えそうで心配。(こども学科)」といった【施設に対する不満】が挙げられていた。03のまとまりでは、『湯船』、『学校』、『門限』が分類され「学校までの坂道がしんどいところ。湯船につかれないところ。(食健康学科)」や「門限が早い(こども学科)」といったように、【制限】に関する記述が挙げられた。04のまとまりについては、『風呂』、『入れる』、『テレビ』、『好き』といった語が分類され、「好きなテレビを我慢しなければならないことがある。お風呂に入れない。家族とのテレビ電話がしづらい。(食健康学科)」といったように、自分の好きなことが出来ないことなどを通じた【我慢】に関する記述が挙げられていた。06のまとまりでは『人』、『悪い』といった語が分類され、07のまとまりでは、『スペース』、『他』、『子』といった語が分類され、「ユニット内でトラブルが起こること。同じ部屋の人と相性が悪いと気まずいこと。同じ部屋の子に疲れていても気をつかうべきところ。共用スペースに他の人の食器が何日も置きっぱなしになっていて、結局それを私が片付けるはめになるところ。(食健康学科)」といった、ユニット内やルームメイトへの気遣いなど【人間関係】を主訴とする文章が挙げられた。08のまとまりでは、『時間』、『一人』、『部屋』といった語が分類され、「二人部屋なので、一人の時間を持ちにくいこと。(こども学科)」といった文章に代表されるように、【一人の時間のなさ】を挙げている学生もみられた。

本調査では、【施設に対する不満】について、多くの記述が確認された。全寮制については、調査年度から開始しており、施設や備品の利用状況を事前に予測しにくかったと考えられる。これらの施設については、調査後、大学が聞き取り調査も行っており、徐々に改善・解消されていく可能性がある。

また、【制限】、【我慢】といった多くの人生活する上で、「順番を守ること」や「見たいテレビ番組を我慢する」等の制約が強く求められていた。このことは、生活する上で、ネガティブな側面といえる。ただし、本学HPでは、「自立して共同生活をするということは、協調性や辛抱強さ、仲間とのコミュニケーションなど、あらゆる人間力がそこで試されます」(令和2年10月確認、長野県立大学HP象山寮の紹介)とされており、これらの我慢や制約に関しては、成長のための糧として、当初から想定されていた事柄といえる。同様に、【人間関係】、【一人の時間】といった、「リーダーとしての人格を形成する場」、「将来を見据えたキャリアデザインの場」といった要素をもっており、教育の目標を達成するための環境が提供されていることが示唆された。

5. 探索的調査を基にした寮生活に関する意識（調査2）

（1）目的

調査1では、寮生活の良い側面として、「友だちとの毎日の生活」、「課題・料理の協力」などが挙げられた。また、悪い側面として、「設備」や「多くの人と活動することによるストレス」が挙げられた。それらを総合し、調査2では【友人関係】、【学習面】、【食生活】、【生活リズム】、【設備】に【全般的な満足度】を加えた寮生活の特徴に注目し、量的調査を行った。また、調査2では調査範囲を全学に拡大し学科間の違いも検討する。

（2）方法

①調査協力者

2018年度入学学生（開学初年度生）257名（GM学科185名、食健康学科31名、こども学科41名）。

②調査時期

2018年6月末に調査を行った。

③手続き

大学の授業を利用し、授業終了後、授業担当者・もしくは、異なる教員によって、調査用紙の配布・回収を行った。教室の移動時間など、回答が困難な場合、自宅で記入し、翌週の授業で回収するようにした。

④調査内容

デモグラフィック変数：性別、年齢、学年、学科、居住環境、朝食頻度等をたずねた。

寮生活の満足度：【友人関係】、【学習面】、【食生活】、【生活リズム】、【設備】に【全般的な満足度】を加え、それらに関する満足度を4件法で回答を求めた（4：満足している～1：満足していない）。加えて、満足度の要因についても明らかにするため、評定の理由についても、自由記述で回答を求めたが、本研究の紙幅の都合上、ここでは報告しない。

⑤倫理的配慮

調査用紙は、無記名であり、個人が特定されない状態で行った。①結果は、研究以外の目的で使用されないこと。②調査への参加は自由であり、回答前や回答の途中で、やめてもいいこと。③回答をもって、調査の同意と見なすことを調査用紙に記載したうえで、調査の際には調査者から口頭で説明し実施した。

⑥分析方法

量的データの分析はHAD（ver. 16.05：清水、2016）を用いた。

（3）結果・考察

①調査協力者

調査協力者は、GM学科166名（男性61名、女性105名）、食健康学科31名（男性2名、女性29名）、こども学科41名（女性41名）の計238名（回収率92%）であった。協力者の

平均年齢は18.32歳（±0.53）であった。

②寮生活に関する満足度

1) 全般的な傾向

【友人関係】、【学習面】、【食生活】、【生活リズム】、【設備】に【全般的な満足度】を加えた6つの視点についての満足度を示すため、各回答の単純集計を図4に示した。

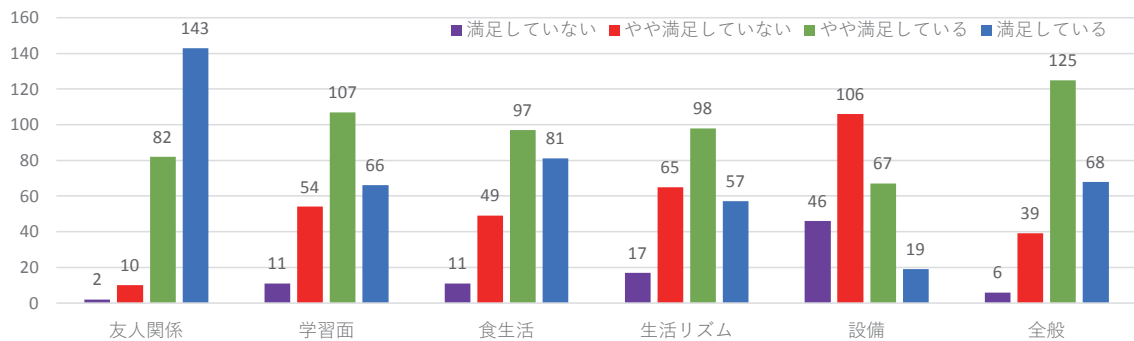


図4 寮生活の満足度（単純集計）

その結果、友人関係については95%の学生が「やや満足している」、「満足している」と回答しており、満足度が高いことが示された。加えて、学習面（72%）、食生活（74%）、生活リズム（66%）に関しても、60%以上の学生が「やや満足している」、「満足している」と回答しており、概ね寮生活に満足している回答が中心であった。その中で、設備面については、64%が「やや満足していない」、「満足していない」と回答しており、不満が高いことが示された。とはいえ、全般的には、81%以上の学生が満足しており、寮全体の満足度としては、比較的高いことが示された。

2) 学科による満足度の違い

最後に、学科ごとの違いを検討するため、カイ2乗分析を用い、回答結果の偏りを検討した。その結果、【友人関係（ $\chi(6)=5.35, p=.50$ ）】、【学習面（ $\chi(6)=8.74, p=.19$ ）】、【食生活（ $\chi(6)=2.05, p=.92$ ）】、【生活リズム（ $\chi(6)=10.04, p=.12$ ）】、【設備（ $\chi(6)=6.40, p=.38$ ）】、【全般（ $\chi(6)=11.18, p=.08$ ）】のすべてにおいて、有意な偏りは確認できず、学科による満足度の違いは示されなかった。このことは、各学科で、異なる目標・興味関心をもっている学生であってもある程度一定の認識をもっていることを示すものである。

6. まとめと今後の課題（総合考察に代えて）

本研究では、本学の教育的特徴を示すため、本学の特徴の1つである「寮生活」について学生から自由記述で回答を求め、その利点と欠点について明らかにした。その結果、利点として「友人と共に課題に取り組む姿」や「学科を越え友人同士で交流している様子」、「自立し、生活している様子」が示された。また、欠点として「一人の時間を持ちにくい中で生活している姿」や「好きなことを制限しながら生活する姿」が示された。この利点・

欠点は、本学の理念を達成するために、寮生活に求めている事柄であり、学生がそれを実感していることは、大学側が設定した学びのための環境がある程度確保されていることを客観的に示すことが出来る結果である。

ただし、今回の調査は、入学後1～3か月の早期の状況に関する調査であることを前提に解釈していくことも必要である。具体的には今回の結果では、入学当初、想定した学びの機会が与えられていることは示すことが出来たが、本研究は、その経験が、真に学生の学びに繋がっているかについては言及できていない。すなわち、ここで示した「寮での経験」と「学生の成長」との関係を検討するなどし、真の学びを評価する必要がある。そのため、今後は、今回の調査結果を基に、1年後、2年後、卒業の時の成長に言及していくよう、調査・研究を進めていく必要がある。

また、学生の学びについては、個々人によって多様なプロセスを経ると考えられることから、最終的には、インタビュー調査等を用いた質的調査を行い、個々人の語りから学びのプロセスを記録に留めていくことも必要である。

7. おわりに

今回は、事業報告の第一歩として開学半年間の調査の報告のみで留めた。しかしながら、本事業は、本研究後も、継続的に調査を行っており、学生のライフスキルの変化やその後の学びについてもデータを累積している。そのため、これらのデータに関しても今後分析し、随時報告していきたいと考えている。さらに、今後も調査を継続する計画であり、これらの結果報告を通じて、本学の教育をより良くするための情報を示していきたい。

付記・謝辞

本研究の調査に回答して下さった学生の方々に感謝申し上げます。加えて、調査に際して、学科を越え、調査協力をいただきました先生方にも大変お世話になりました。誠にありがとうございます。

なお本研究は、「長野県立大学 公募型裁量経費事業 理事長裁量経費：ライフスキルの成長を促す大学の教育力評価事業」の助成を受け行われています。大学全体の教育評価といった大きなテーマについて調査・研究する機会をいただきましたことを感謝しております。本事業を支援して下さる安藤国威理事長、ならびに様々な面でサポートして下さる事務職員の方々へも記して感謝申し上げます。誠にありがとうございます。

引用文献

- Boyd, J R. (2010) The Essence of Winning and Losing, https://fasttransients.files.wordpress.com/2010/03/essence_of_winning_losing.pdf (参照2020/10/12)
- 中央教育審議会 (2008) 学士力教育の構築に向けて (答申) 本文・概要 https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfi

le/2008/12/26/1217067_001.pdf (参照2020/10/12)

Foresight University: Shewhart-Deming's Learning and Quality Cycle, The Foresight Guide Chapter 4 Models, <http://www.foresightguide.com/shewhart-and-deming/> (参照2020/10/12)

原田新・池谷航介 (2019) 「大1 コンフュージョン」の実際 (第3報): ライフスキル、意欲低下、心理的ストレス反応との関連、岡山大学教師教育開発センター紀要、9、243-250.

原田新・池谷航介・松井めぐみ・望月直人 (2018) 「大1 コンフュージョン」の実際 (第1報): 高校と大学のギャップに戸惑う新入生の実態調査、岡山大学教師教育開発センター紀要、8、97-107.

樋口耕一 (2017) 統計を深く知るフリーソフトウェア「KH Coder」の文章データの分析、統計、68、42-47.

伊藤智樹 (2013) 「ピア・サポートの社会学に向けて」伊藤智樹編著『ピア・サポートの社会学—ALS、認知症介護、依存症、自死遺児、犯罪被害者の物語を聴く』晃洋書房、1-32.

小島麻子・池田尚子・桑田有・中西由季子 (2018) PDCAサイクルを取り入れた中学生への食育の試み、日本健康教育学会誌、26、261-269.

越川陽介・磯部智代・池見陽 (2012) ア・サポート活動にClearing A Spaceを用いる試み I : 効果測定を中心に、関西大学臨床心理専門職大学院紀要、2、13-21.

米谷淳・山内乾史 (2020) ピアサポートと学習支援: 1. 北海道大学と東北大学での面接調査をもとに、大學教育研究、28、87-100.

森川智之 (2013) 決断力を高めるビジネス会計 第4章、pp.145-216、中央経済社.

百崎知代・山本眞利子 (2020) コンプリメントが大学生のソーシャルサポート期待・不安・適応感に及ぼす影響、久留米大学心理学研究、19、1-11.

大石由起子・木戸久美子・林典子・稲永努 (2007) ピアサポート・ピアカウンセリングにおける文献展望、山口県立大学社会福祉学部紀要、13、107-121.

齋藤憲司 (2002) 学生相談—最近の動向1999~2001—、学生相談研究、23、105-114.

佐藤有耕・石井健太郎 (2019) 居住状況と友人関係からみた大学生の孤独感—大学新入生に着目して—、教育心理学会第61回総会発表論文集213.

清水裕士 (2016) フリーの統計分析ソフトHAD: 機能の紹介と統計学習・教育、研究実践における利用方法の提案、メディア・情報・コミュニケーション研究、1、59-73.

吉川歩 (2020) 問題解決の「か・き・く・け・こ」ループの提案、甲南大学教育学習支援センター紀要、5、53-59.